

| | |
|-----------|--------------------------------------------------------|
| 氏 名 (本 籍) | 岡 澤 哲 子 (奈良県) |
| 学 位 の 種 類 | 博士 (学術) |
| 学 位 記 番 号 | 博課第374号 |
| 学位授与年月日 | 平成20年 3 月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 人間文化研究科 |
| 論 文 題 目 | 幼児の運動有能感に及ぼすジェンダーの影響に関する研究 ー運動有能感を高める幼稚園での保育実践をもとにー |
| 論文審査委員 | (委員長) 教授 佐久間 春 夫 教授 麻 生 武 教授 井 上 洋 一 教授 藤 原 素 子 |

論文内容の要旨

本論文は、有能感の認知が内発的動機づけを生じさせ、自律的な行動を促すとする理論的背景を基に、身体を媒介とした有能感である運動有能感を高めることの意義と方略について幼児期を対象に実証的分析を行うことを目的とした。

第Ⅰ部では、幼児の運動有能感の認知と他律的な行動因としての社会的環境要因であるジェンダーの認知との関連性を明らかにし (第1～4章)、第Ⅱ部では、ジェンダーの顕現性を弱める保育環境要因の工夫により、性にかかわらず幼児の運動有能感を高めることが可能なことを、保育実践をもとに検証した (第5～8章)。

序論では、幼児の運動有能感と運動行動に関する先行研究、及び幼児の自己認知に影響を及ぼす社会的環境要因としてのジェンダーに関する先行研究を総括し、幼児の運動有能感の構造を明確にすること、さらに運動有能感の性差の実態を捉え、保育現場への介入によるジェンダーの影響の顕現性を弱め、性に帰因しない運動有能感を高める具体的な援助法の必要性を明らかにし、社会的認知理論を基礎に運動有能感とジェンダーの認知過程を布置連関した理論的枠組みを作成し、本研究で検証すべき概要を明らかにした。

第1章では、幼稚園の運動場面に限定した幼児の運動有能感テストを作成し、因子分析の結果から、幼児の運動有能感の構造を明らかにし、妥当性、信頼性の高い幼児の運動有能感を測定するための基礎的尺度として有効であることを示した。

第2章では、筆者の作成した絵カード式幼児の運動遊びに対する性度測定による1993年と2005年の

調査結果から、両年においても、幼稚園における幼児の身近な運動遊びにおいて、幼児がジェンダー・ステレオタイプと一致した性度を認知しており、運動遊びといった環境に対してジェンダー・ラベルが変わらず作用していることを見出した。

第3章では、幼稚園での具体的な行動面に観られるジェンダーの影響をみるために、自由遊び時における遊びの選択を取り上げ、集団的時間標本観察法により検討を行った結果、第2章での結果と同様に、幼児がジェンダー・ラベルに影響された遊びを選択していることを見出した。

第4章では、第1章で作成した尺度を使用して幼児の運動有能感を測定し、男女児ともに第2章での運動遊びの性度に対応した運動遊びの選択と、それらに対する運動有能感をより高く認知していることを明らかにした。

第5章では、幼稚園の保育現場に介入し、教師の言葉がけの中に幼児の運動有能感を高めるフィードバック機能をもつように変えることが、性とは関係なく幼児の運動有能感を高める結果を得た。また、事例分析から、教師と幼児の関係性が運動有能感の高まりに質的差異をもたらし、一人ひとりに応じる教師の受容的な言葉がけがジェンダーの顕現性に関与していることを明らかにした。

第6章では、前章での教師の受容的な言葉がけの重要性を受け、教師の態度を、一人ひとりを受容的に捉え、直接幼児に働きかけることを意識化した保育実践として保育日誌を改善し、半年間の観察を行った。その結果、遊びの選択や受容感の認知にはジェンダーの影響がみられたが、教師の受容的な態度が幼児の友達関係に対してモデリングされ、性にかかわらず幼児の運動有能感を高める結果を得た。

第7章では、競争場面のある運動会を挟む保育期間において、幼児の運動有能感を高めるという明確なねらいに教師の態度を変容させることを試みた。保育へのねらいを明確に持った教師の態度は、性にかかわらず幼児の運動有能感を高めること、とりわけ運動有能感が低かった幼児への効果が顕著である結果を得た。

第8章では、保育の人的環境の一つである友人関係に焦点をおき、運動遊び時に幼児同士の応援時間や応援コーナーを設定し、名前を呼ぶ、励ます、褒める、拍手をする、ハイタッチをするといった正のフィードバックを運動場面で意識的に取り入れることで、性にかかわらず運動有能感を高めることにつながることが検証した。

その結果、正のフィードバックの有無に関わらず、女児の運動有能感が男児より高く、ジェンダーの影響により、運動に対する社会からの期待がより大きいと思われる男児の運動有能感を必ずしも高める結果は得られなかった。第5章で明らかにされた教師の言語的フィードバックと比較した場合、友達からのフィードバックが幼児の運動有能感の認知に及ぼす影響について明らかにすることができなかった原因について触れた。

終章では、第1章から第4章までに得られた結果をもとに、幼児の運動有能感に及ぼすジェンダー

の影響の実態を明らかにし、第5章から第8章における保育環境要因に介入した実践研究の結果をもとに、保育の環境要因を変えることによりジェンダーの顕現性が弱められ、幼児の運動有能感が高められることについて総括的論議を行い、考慮すべき保育環境についての提言を行った。

本研究のテーマである、幼児の運動有能感とジェンダーの影響に関する残された課題として、①運動有能感の年齢的な変化を検討する研究や縦断的研究等を視野に入れること、②幼児のジェンダーに関して保育における運動以外の領域と幼児に関わる保育以外の分野と連携した実践研究、③運動有能感を高めるためのより望ましい教師の援助方法を検討することの必要性について述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、社会的認知理論における、行動・環境・個人（思考・認知）的要因が相互に規定しあっているという三者間相互決定性を基本に、幼児の運動有能感の認知とジェンダーの認知との連関に関する理論的枠組みを構築し、保育環境に介入することにより、幼児の運動有能感に及ぼすジェンダーの影響の実態を明らかにするとともに、性にかかわらず幼児の運動有能感を高める保育に最も影響を与えるのが教師であり、教師が幼児一人ひとりに応じた受容的な言葉や態度であることを実証した点に特色があるといえる。

本論文は、大きくは2部から構成されている。第Ⅰ部では、幼児の運動有能感の認知と他律的な行動因としての社会的環境要因であるジェンダーの認知との関連性が明らかにされ（第1～4章）、第Ⅱ部では、ジェンダーの顕現性を弱める保育環境要因の操作により、性にかかわらず幼児の運動有能感を高めることの可能性が保育実践をもとに検証された（第5～8章）。

序論では、幼児の運動有能感と運動行動に関する先行研究、及び幼児の自己認知に影響を及ぼすジェンダーに関する先行研究を総括し、幼児の運動有能感の構造を明確にすること、さらに運動有能感の性差の実態を捉え、保育現場への介入によるジェンダーの影響の顕現性を弱め、性に帰因しない運動有能感を高める具体的な援助法の必要性を明らかにし、社会的認知理論を基礎に運動有能感とジェンダーの認知過程を布置連関した理論的枠組みを作成し、本研究で検証すべき概要を明らかにした。

第1章では、幼稚園の運動場面に限定した幼児の運動有能感テストを作成し、因子分析の結果から、幼児の運動有能感の構造を明らかにし、妥当性、信頼性の高い幼児の運動有能感を測定するための基礎的尺度として有効であることを示した。

第2章では、筆者の作成した絵カード式幼児の運動遊びに対する性度測定による1993年と2005年の調査結果から、両年においても、幼稚園における幼児の身近な運動遊びにおいて、幼児がジェンダー・ステレオタイプと一致した性度を認知しており、運動遊びといった環境に対してジェンダー・ラベルが一貫して作用していることを見出した。

第3章では、幼稚園での具体的な行動面に観られるジェンダーの影響をみるために、自由遊び時における遊びの選択を取り上げ、集団的時間標本観察法により検討を行った結果、第2章での結果と同様に、幼児がジェンダー・ラベルに影響された遊びを選択していることを見出した。

第4章では、第1章で作成した尺度を使用して幼児の運動有能感を測定し、男女児ともに第2章での運動遊びの性度に対応した運動遊びの選択と、それらに対する運動有能感をより高く認知していることを明らかにした。

第5章では、幼稚園の保育現場に介入し、教師の言葉がけの中に幼児の運動有能感を高めるフィードバック機能をもつように変えることが、性とは関係なく幼児の運動有能感を高める結果を得た。また、事例分析から、教師と幼児の関係性が運動有能感の高まりに質的差異をもたらし、一人ひとりに応じる教師の受容的な言葉がけがジェンダーの顕現性に関与していることを明らかにした。

第6章では、前章での教師の受容的な言葉がけの重要性を受け、教師の態度を、一人ひとりを受容的に捉え、直接幼児に働きかけることを意識化した保育実践として保育日誌を改善し、半年間の観察を行った。その結果、遊びの選択や受容感の認知にはジェンダーの影響がみられたが、教師の受容的な態度が幼児の友達関係に対してモデリングされ、性にかかわらず幼児の運動有能感を高める結果を得た。

第7章では、競争場面のある運動会を挟む保育期間において、幼児の運動有能感を高めるという明確なねらいに教師の態度を変容させることを試みた。保育へのねらいを明確に持った教師の態度は、性にかかわらず幼児の運動有能感を高めること、とりわけ運動有能感が低かった幼児への効果が顕著である結果を得た。

第8章では、保育の人的環境の一つである友人関係に焦点をおき、運動遊び時に幼児同士の応援時間や応援コーナーを設定し、名前を呼ぶ、励ます、褒める、拍手をする、ハイタッチをするといった正のフィードバックを運動場面で意識的に取り入れることで、性にかかわらず運動有能感を高めることにつながることを検証した。

その結果、正のフィードバックの有無に関わらず、女兒の運動有能感が男児より高く、ジェンダーの影響により、運動に対する社会からの期待がより大きいと思われる男児の運動有能感を必ずしも高める結果は得られなかった。第5章で明らかにされた教師の言語的フィードバックと比較した場合、友達からのフィードバックが幼児の運動有能感の認知に及ぼす影響について明らかにすることができなかった原因について触れた。

終章では、第1章から第4章までに得られた結果をもとに、幼児の運動有能感に及ぼすジェンダーの影響の実態を明らかにし、第5章から第8章における保育環境要因に介入した実践研究の結果をもとに、保育の環境要因を変えることによりジェンダーの顕現性が弱められ、幼児の運動有能感が高められることについて総括的論議を行い、考慮すべき保育環境についての提言を行った。

以上のように、本論文は自律的な行動を促す内発的動機づけ要因として幼児の運動有能感に着目し、その構造を明らかにすると共にジェンダーの影響について、保育現場に介入することによって明らかにしたこと、さらに性にかかわらず運動有能感を高める具体的な援助法示したことは、保育に携わる者にとって貴重な提案となっていると評価される。

なお、本論文の内容は、本学の人間文化研究科年報、所属大学研究紀要の他、スポーツ教育学研究、スポーツとジェンダー研究、奈良体育学会研究年報などに10篇の原著論文として公表されている。さ

らに、日本体育学会、日本保育学会、日本子ども学会などでも発表されており、幼児の運動有能感尺度の作成と共に内容について関連分野の研究者からも高い評価を得ている。

よって、本論文は奈良女子大学博士（学術）の学位論文として十分な内容を備えているものと判断される。